

《書評》

中西善信著 『知識移転のダイナミズム：実践
コミュニティは国境を越えて』 白桃書房，2018年

石山恒貴*

1. 本書の狙い

本書は、組織による知識の獲得を、知識移転という観点で解明しようとする労作である。知識移転の経路は、組織間・個人間の紐帯が活用されるわけだが、その詳細は明らかになっていない点が多い。そこで本書の射程は、知識移転（組織による学習）にとどまらず、実践コミュニティ（個人による学習）まで拡大されている。しかも、興味深いことに実践コミュニティは、越境型と定義される組織の内外を架橋する類型がリサーチサイトになっている。具体的には国際航空分野がリサーチサイトである。この知識移転プロセスには、国際機関、政府機関、航空会社、航空機メーカーなど多様な関係者が関与する。

題名にあるように、本書は組織の境界のみならず、国境を越える知識移転の詳細の解明を試みている。それはもちろん広範な領域を対象としているのであるが、実践コミュニティ論を基盤とすることで、人間の泥臭い営みと相互作用に焦点があたることになる。このように、射程の広さと個人レベルの子細な意識・行動の緻密な分析が両立していることが本書の意義であり、希少性であろう。それでは、本書が知識移転研究にどのような理論的貢献を果

* 法政大学大学院政策創造研究科教授

たしたのか、考察を進めていきたい。

2. 本書の概要と構成

本書は7章で構成されている。各章の内容を紹介しつつ、その理論的貢献についての考察を述べていきたい。第1章はイントロダクションである。研究の背景、基本的な問い、リサーチサイトとその選定理由が述べられている。国際航空分野を選定することで、ダイナミックな知識移転プロセスが研究射程となっている。また性能準拠型航法という新技術を対象とすることで、新技術の普及における知識移転の営みを分析することができる。

第2章では、先行研究として知識移転と実践コミュニティがレビューされている。本書では知識移転の構成概念を、送り手、受け手、知識特性、経路、成果、関係性、文脈、知識移転活発度と整理している。これらの構成概念は、知識移転プロセスの4段階（創始、実施、向上、統合）において個々に関連を有する。構成概念と4段階の個々の関連性を子細に検討することで、知識移転研究の全体像を把握することが可能になる。こうして知識移転研究をレビューしたうえで、本書はそれらの課題を2点あげている。第1点は、「場」や「プラットフォーム」と呼ばれる知識移転の基盤の詳細の解明である。第2点は、知識がルーチン化される（実践に埋め込まれる）ためには、向上段階と統合段階が一方通行の流れではなく、反復かつループ的な関係にあることが示されていないことである。

実践コミュニティについては、多くの先行研究が渉猟されている。というのも、実践コミュニティの定義は数多く、乱立しているからである。本書では実践コミュニティを、協働こそ実践共有とするもの（協働型実践コミュニティ）、協働がなくとも知識共有さえあれば実践共有とするもの（勉強型実践コミュニティ）、日常的に協働が生じている複数の部分集合からなるもの（複合型実践コミュニティ）の3種類に類型化する。この類型化は、乱立す

る実践コミュニティの定義を明快に整理している。

知識移転と実践コミュニティの研究のレビューの結果，組織による知識移転，個人の学習，実践コミュニティの3領域におけるリサーチクエスチョンが設定されている。続いて，第3章では定性研究（第4章と第5章），定量研究（第6章）の調査・分析方法が述べられる。

第4章では，航空分野における個人の学習と実践コミュニティに関する定性研究の結果が示される。本章の理論的貢献は主に2点である。第1点は越境型実践コミュニティにおける具体的な学習内容の特定である。それは，組織内のみにおいては入手困難な周辺知識の獲得，および他組織の成員の知識，経験，メンタルモデルに対する理解の促進と対人スキルの形成である。第2点は，副次的コミュニティの存在の発見とその概念の提案である。副次的コミュニティは公式コミュニティに付随する非公式な存在であるが，公式コミュニティと相互に貢献しあう。特に越境型副次的コミュニティは，知識開示が自らの利益を損なわず公共の利益にかなうテーマであるという環境要因が整うと活性化する。実践コミュニティの活性化における副次的コミュニティの影響の発見は，重要な理論的貢献といえよう。

第5章では，航空分野における組織間での知識移転が定性的に研究されている。本章では性能準拠型航法導入に関する知識移転が，航空管制業務提供機関，監督機関，国際機関，また民間営利企業である航空会社および一般航空の間の複雑な経路とともに分析されている。本章の重要な理論的貢献は，修正版知識移転プロセスを提示したことにあろう。従来の知識移転プロセスは，創始，実施，向上，統合の各段階を一方通行の関係として進行していくとされていた。しかし，性能準拠型航法のような新しいルールが導入される際には，ルール作りと実践の試行錯誤的な運用が求められ，それによってルーチンが完成する。すなわち，知識受容後，初期値のルーチンが反復的に修正されていく。これは向上段階と統合段階のループ的な関係を意味し，このループ的な関係を取り入れたものが，修正版知識移転プロセスなのであ

る。修正版は、知識移転のより現実に即した形式として論理的に納得性があり、理論の一般化の可能性が高いものであろう。

また、本章では、知識移転においてプラットフォーム（複数のアクターが参加、交流、価値創造する場）が紐帯を形成し維持する機能があること、プロモーター機関（プラットフォームを運営する外部第三者機関）がプラットフォームへの正統性を付与する機能があることが解明されている。

第6章では、定量研究（質問紙調査）として実践コミュニティを通じた知識移転が分析されている。質問紙調査の対象者は、国際航空分野における複数の新技術関連会議体出席者である。本調査の重要な構成概念として「副次コミュニティ有効感」がある。これは第4章で発見された副次コミュニティを定量的に定義したものである。分析の結果、「副次コミュニティ有効感」は「知識移転実感」に正の影響を及ぼしていた。また「副次コミュニティ有効感」の規定要因として、プラットフォームの「目的明瞭性」と「公益性」が正の影響を及ぼしていた。

以上の分析結果は、副次的コミュニティが知識移転を促すことを示しているため、知識移転における実践コミュニティの効果を理論上はじめて示したことを意味する。また良き場（プラットフォーム）の条件として、「目的明瞭性」と「公益性」という具体的な内容を示したことにもなる。

第7章は、本書の分析結果を理論的および実践的にまとめている。重要な理論的貢献として、副次的コミュニティを発見したこと、また副次的コミュニティが知識移転を促すことを明らかにしたことが指摘されている。同時に、第5章の発見である、知識移転におけるプラットフォームの紐帯維持機能、プロモーター機関の正統性付与機能が理論的貢献として指摘されている。

これらの理論的貢献に基づき、実践的含意として、プラットフォームに参加することの重要性、公的第三者機関をプロモーター機関と位置づけプラットフォームを運営させること、プラットフォームの目的の明示化と公益性を

確保することが示唆されている。

3. 本書の特徴と意義

本書の特徴として、貴重なリサーチサイトの調査結果を緻密に組み上げていることが指摘できる。国際航空分野という貴重なリサーチサイトに密着した研究が行われたことにより、組織のみならず国という境界を越えた知識移転と実践コミュニティの理論化が可能となった。これは本書の著者が研究者であるとともに、実務家として民間企業や公益法人において飛行方式に接し、国際的な会議体のワーキンググループの座長を歴任してきたという経歴にもよるものだろう。また重厚な文献レビュー、定性研究、定量研究が相乗効果を発揮することで、明確な理論的貢献が生じている。

本書の意義は、従来は明確さに欠けていた知識移転論と実践コミュニティ論の関係性を明らかにしたことにあろう。また両者を架橋する発見事項として、副次的コミュニティが重要な役割を果たしている。そもそも、実践コミュニティそのものが、公式組織と異なり、その性質はわかりにくいものである。本書は、実践コミュニティの中でも、さらに存在を特定しにくい副次的コミュニティを浮き彫りにし、それが浮き彫りになった結果、知識移転につながる効果が発見されたのである。これは上記に述べた緻密な研究の組み上げによって、はじめて可能になったものであろう。この発見は、今後の知識移転論と実践コミュニティ論の接合という研究分野の地平の拡大の端緒となるものであり、その意義の大きさは、どんなに強調してもしすぎることはないと考えられる。

4. 今後の課題

先述のとおり、本書の重要な意義は、知識移転論と実践コミュニティ論の接合にある。その接合は、主として第6章の定量研究における「副次コミュニティ有効感」の効果によって説明されている。

ただし、本書においては、第5章で修正版知識移転プロセスという概念と、プラットフォームの紐帯維持機能およびプロモーター機関の正統性付与機能という知識移転における機能が提示されている。この5章で提示されている内容は、組織による知識移転として整理されている。その整理において、プラットフォームは研修、会議体、プロジェクトチーム、会合など多様な場が包含されているが、そこには副次的コミュニティが付随する。

プラットフォームに副次的コミュニティが付随するのであれば、第4章の個人の学習と第5章の組織による知識移転には、密接な関係性があると考えられる。しかしながら、本書では、その関係性は定量研究における「副次コミュニティ有効感」の効果によって説明されているだけである。だが、修正版知識移転プロセスにおける向上段階と統合段階のループ的な関係や、プラットフォームの紐帯維持機能に対して果たす実践コミュニティにおける個人の学習の役割にも、様々な機能、役割、条件が存在するのではないだろうか。そうした詳細を解き明かすことが、知識移転論と実践コミュニティ論の接合という研究分野の地平の拡大を促していくことにつながるだろう。

もっともこの今後の課題は、本書が意欲的に知識移転論と実践コミュニティ論の接合を意図したからこそ生ずるものであり、本書の意義を損なうものではない。本書は新しい理論研究の地平の可能性につながる、貴重な価値を有する一冊である。